



藻
鹽
袋

中村俊定文庫
文庫 18
328
3



和漢三才圖會

平住專庵著 全七冊

全八十一冊

天地之間ニアラユルノ年曆來由ヲ具スル國字ヲ其源

徂徠先生國字牘

物茂卿述 全

學文ヲナスノ源ト成ルキ文通往答ヲ記ス

辨復古

養齋先生著 全

今世古學ノ古學ナラサル真偽ヲ弁明ス

南秋江鬼神論

鬼神有無ニツイテ疑ヲ生スルヲ以是ヲ弁ス 全

津逮秘畧翻刻也 全

冷齋夜話

詩文經書禪學ホノ故事或ハ笑談奇事

小説珍奇ノ一トヒラ集ル書ナリ

萬物故事要畧

全八冊

世ニアラユルノ來歴ヲ記虚ヲ糾ソノ

初學指南抄

毛利貞齋著 全 〇朱引指南唐ノ歷代要覽廿二史大略經各詩文 讀法指南ヲ委ク載經文出所ヲ記都テ初學ノ為ニ成リヲ集ム早學文各也

異端ヲ弁明シ儒門ノ正路ヲ開キ孔子真ヲ發明ス

弁道漫錄

全

學山錄

蘭林先生著 全六冊

天地事物言論行事藝文變異文釋稱謂字

春秋正月考

唐本經解ノ内翻刻 前後合冊

唐土往昔ハ今ノ一月或ハ十二月ヲ以テ正月トシ今

澡塩袋之三

四季混雜

歸花

冥靈堂二晶

勝間田蓮

隱士素堂

雲透郭公 乘夫

冬菴

僧拾芥

宮川船 海翁丈岳

浮洲岩

岳部喬阿

回子會齋 中村琴奉

花雪

佐島秀全

吉野花 伊崎文里

環堵菴記

隱士郁芬

菴宿蒲園 菊田梅五

叢菴

北林居吟園





水边登顔 栗原伴馨

東雲梅 曾老鼠

夕立ノ松 僧凉牛

水間詣 銀塘浮生

浪ノ衝 千足尾谷

戲幕船 菊菴巴鴨

初午 松木尾海

寛水柱 島野壽躰

蹴鞠枰 国吉晴躰

雲ノ翠 菊田紀之

湯坂月 堤堂晋阿

多枯藤 五重庭露月

胡蝶 雀下沾凉

初若菜 大場寒和

小深塩袋之三

菊岡采山著

蝶醉之蜂 和ハモヤウノ花 一品

○秋賢寧落花詩

蝶醉蜂狂香正濃 晚來階下墜 衰紅
開時費盡陽和力 落處難堪一陣風

○蜂蜂空有恨 風雨太無情 活法

○本綱曰蝶蛾類也大曰蝶小曰蠶其種甚繁皆四翅有粉好嗅花香以鬚代鼻其交以鼻交則粉退又曰蜂尾垂鋒故字从夂蜂有君臣之礼範故一名曰蠶

○蜂記王元之云蜂ノ中二蜂王アリ窠ノ中央一段高キ臺アリ是王座也王ノ蜂兒ヲ其中二生テ王トナル

其王死スレハ餘ノ蟬數潰テ皆死

○著聞集云云知應二年九月上旬京中梅梅桃李の花開く云のそよのあつくかりなり延喜九年八月廿九日幸修りせるとやそのこひに板抽扱ありもさたたりきり聖代にふのりありいなる福に御らん

○群花に陸中の湯のわらうかりりよこそそいふこく樹木の酔なりよんく実をむきまのりなり是を比しといふ易大過九五云括揚生華老婦得其士夫

繁宗祇池蓮ある公うれ 煮堂

○袋草紙云新田を教王勝間田の池ありてゆらり感徳ありあつり運り給ひて婦を婦人よそそいふなり拾りく福間田の池とんり水満くして蓮始きたる

何ヶ輪ノ、新腸得て言々〜
多しむとの音と物といふ〜

勝間田の池に蓮あり〜
と傳し給ふにあり人々を彼教王に強きたり〜
あるも故法観法師の云彼教王の介此大蛇なり〜
によりて彼音のいふはゆら繁か人といふ余と〜
乃此大蓮なり〜
を感歎するなり〜
の由是所寺のそに月名の池あり我志る蓮なり〜
才子六子婦人の秀とあり〜
水なり〜
勝間田池ハ八を四勢に下依のま〜
作るといひ顯眼ハ大和と云ふ〜

○宗祇法師、自然奇又種玉菴と云紀列の人飯尾氏の子なり
 唱して一律院子今、難蒙に如秋と嗜く東野列子就てた今
 集の微音と信文一連詞の花下と稱せ常は香道に耽て香
 宗信相河、還僧殊支少、あつく支し、とむきよ、あひり、香と様、統
 とまゝ、一日、吾非愛、鬚也、欲、香氣之常在、馬法、画、優、也、
 文龜二年七月、西日、相列、於、根、湯、本、に、お、の、く、卒、于、時、八、十、二、歲、
 栢園、里、定、輪、寺、に、葬、り、
 ○草山集、宗祇、讚、云、是、何、人、斯、
 東野、川、之、資、壯、丹、花、之、師、自、然、奇、宗、祇、
 元政

おのぞれお海もかろほほほほ 来夫

○新拾遺集 むくそのまればびくそくのちくくは
 たんくくここと勢いさこゆき 源仲繼

○蜀王本記云、為蜀、望帝、淫、共、臣、驚、靈、妻、乃、禪、位、云、去、時、
 此鳥鳴、故、蜀、人、見、杜、鵑、鳴、而、悲、望、帝、共、鳴、如、曰、不、如、歸、
 ○真後抄云、向古、哥、の、二、四、八、と、よ、め、の、い、何、の、り、を、言、云、二、四、
 八、と、よ、め、の、人、も、く、る、一、或、四、死、道、の、を、し、な、の、い、ま、け、よ、る、も、た、ん、
 二、四、八、と、よ、め、の、終、と、云、事、く、し、の、い、は、は、は、と、く、と、よ、め、の、八、考、の、い、ま、と、云、
 八、考、の、い、ま、し、常、の、い、ま、と、云、く、に、い、わ、は、は、は、と、よ、め、の、い、ま、と、云、
 鶴、志、も、く、ま、さ、り、の、い、ま、と、云、く、と、よ、め、の、い、ま、と、云、
 は、鶴、の、い、ま、よ、め、の、い、ま、と、云、く、の、考、の、い、ま、と、云、く、と、よ、め、の、い、ま、と、云、
 八、し、八、と、よ、め、の、い、ま、と、云、く、の、考、の、い、ま、と、云、く、と、よ、め、の、い、ま、と、云、
 二、四、八、と、よ、め、の、い、ま、と、云、く、の、考、の、い、ま、と、云、く、と、よ、め、の、い、ま、と、云、
 う、い、ま、と、云、く、の、考、の、い、ま、と、云、く、と、よ、め、の、い、ま、と、云、
 よ、い、ま、と、云、く、の、考、の、い、ま、と、云、く、と、よ、め、の、い、ま、と、云、
 あ、い、ま、と、云、く、の、考、の、い、ま、と、云、く、と、よ、め、の、い、ま、と、云、

三際大仙之新云

とらふりて子なげとておほいなる三回八とよはにめつりしる
とらふりてふるふるあふり百千世とてしるる下略

○袋系紙云人々大原より水子遊りて名るふりて了る傳光御
傳子下馬をんおとらふりてあまを仰み答て云は下良選の目坊
なりかて下馬せうんやと人々感歎しとて皆下りまきとて傳の
良選乃賜今ふあると云々式傳傳々云降るは良選うかきけり
下ぬ被いすいこころと云

六星のあもあも子親あしとてまきとてとらぬおつる

以致好推遠不入良選旧坊大原緒林多の中にあり

○准南子云山雲艸葑水雲魚鱗旱雲烟火洪雲波水各
象其形類所以感之雲成章曰雲增雲覆火曰雲陰雲收
日出雨止曰晴晴
和名久毛

能因子なりし物や冬ふそり 拾芥

○風雅集 埋火子とてうまあひりて

あふりて冬とてあふりてひるる 俊成

○家集 ちと子のとてあふりて袖のぬるる

洞よ麻れとてしるる 長明

○能因法師は俗名水燈と云攝禪見云の志録に世に云
振付国古曾部とてふりてあふりて直り入道と云

○袋系紙云和書にひびりての所をてあふりて能因法師
長徳と師とてあふりて肥後進士とてあふりてあふりて
長徳の意のあふりてあふりて車の輪換とてあふりてあふりて
のあふりてあふりてあふりてあふりてあふりてあふりて
とて自然に遇るのあふりてあふりてあふりてあふりてあふりて

能因云云む言ひし事よりよひひきや長能云

ふゆきも流るるをみるおまののちゆりうしつ時あふなり
かろのちうくゆきをみるこころをよりの時とほひのちを集
長能の言をく入し 案作のち、ヨシキ言の秋し

又云能因と古事部より毎年花燈りの上流して大江云キニスケ
五條東の河原のちややの侍のちを流るる様相あり其のちを
わしたんふあふ勸童丸といふ童一人あふと後ふ云流るる孫
公仲子、幸ふおまのちを流るるのちを流るるのちを流るる
とそ是公仲子有流るるのちを流るる

又云能因一時アハトキおまの流るる 都をよとあふとそにせり
此のちよく西河の園は秋かよつてまておまのちを流るる
流るるのちを流るるのちを流るるのちを流るるのちを流るる
一室にユキ流るるのちを流るるのちを流るるのちを流るるのちを流るる

真列より級よりよひひては哥と世のちを流るるのちを流るる
実の真列へ下ゆして、十條の記と書又云能因元少合
けり、ユキ流るるのちを流るるのちを流るるのちを流るるのちを流るる

御在派遊くや 鯨の拍飾 丈岳

○社説云毎年九月三日文川より鯨とる拍の葉の色で
太神宮へ献之或人云昔年子拍飾を節物とるは拍飾
○新古今集 驚りありて、ユキ流るるのちを流るるのちを流るる

○心御柱、ユキ流るるのちを流るるのちを流るるのちを流るる
○續拾遺集 神尾や西河のまのちを流るるのちを流るる

○ユキ流るるのちを流るるのちを流るるのちを流るるのちを流るる
○ユキ流るるのちを流るるのちを流るるのちを流るるのちを流るる

○和名抄載食經云羊魚似鱒而小有白皮非也鮎者ナニツナリト云長秋表冬死故名羊魚和名抄用鮎字俗從之コレ鱒春生夏

○日本紀云神功皇后征三韓時到火前國松浦縣於玉嶋里小河初之曰朕欲求財國若有成事者河魚飲釣因以拳竿乃獲細鱒魚時曰希見物也故号其処曰梅豆羅國

今謂松浦訛焉是以其國女人每當四月上旬以釣捕羊魚於今不絕但男雖釣之以不能獲魚

○本綱云樹有二種叢生小者名抱高者名大葉櫟

○和名抄 櫟 加之波 或用拍字

○このかハ 三葉の栢をいふ太神宮ゆく三葉の栢をいふ

御綱葉 日本紀 御綱拍 延喜式 三角拍 國史 又みづ栢云又水の栢も云水栢と流るるくみづ栢をいふ

津島やこの栢をいふして本をまばゆきにしてをある 後紀
この栢もこの栢もこの栢もいふをいふの栢をいふ 備前
その栢もこの栢もいふの栢をいふの栢をいふ 小信長
○伊勢日記云天文年中に伊勢國後念の長官常政といふ其栢
及をさすり先聖殿の通徒をあらうよみて法人常政せりそのま
常政殿忌の禁火を私子免す事あり神宮祓宜忌をいふま
かり奏問をいふく流泥子おろすまんとし時に神宮の木の葉に
虫喰のくさわり
常政をいふまろくはありきよいそ屋さるん栢たの肉
神宮の木の木の奇物をいふす奏聞せり亦さすり前にもいふく
木の葉の虫喰の奇なり帝御威あり流泥と後く常政老
後よ衣冠はくはるる春宮の木の木の月おろす栢あり空中にけ
流人のまを奇異いふるるくはありきよいそ屋さるん

涼くー浮洲北界のあり所 喬阿

○五葉集 思根つゝふあものひこりるありく

さくーさるれねんのか 大に宗あ

○浮洲の北は徳州東戸の海りありと云ふの條は云々ー平家物語
の北界のさるれねんのか ○平家物語云々は國の北人徳三郎重盛は五
日のあふ今浦の男と人さるれねんのかと云ふを
とくあせては海さるれねんのかと云ふを
浦のさるれねんのかと云ふを
よるあてはたふん川際の中さるれねんのかと云ふを
あふあてはたふん川際の中さるれねんのかと云ふを
かるとしてはたふん川際の中さるれねんのかと云ふを
びてさるれねんのかと云ふを

あつちの西をさるれねんのかと云ふを
あつちの西をさるれねんのかと云ふを
あつちの西をさるれねんのかと云ふを
あつちの西をさるれねんのかと云ふを
あつちの西をさるれねんのかと云ふを
あつちの西をさるれねんのかと云ふを
あつちの西をさるれねんのかと云ふを
あつちの西をさるれねんのかと云ふを
あつちの西をさるれねんのかと云ふを
あつちの西をさるれねんのかと云ふを

注云は男と云ふは我師の僕一と云ふは我師の僕一と云ふは我師の僕一

○東鑑第三云平氏左馬頭行盛朝臣引率五百餘騎軍
兵搆城郭於備前兒嶋之間佐々木三郎盛細為武衛御
使為責落之雖行向更難凌波濤之間濱浮案輿之處行
盛朝臣頗招之仍盛細勵武意不能尋乘船乍馬乘渡藤

皆敗走以茂子一して利を得終に此國縁にありて以五月五日
兵忌と祭とし本家の社に舎人親王と祭し亦く方矢の政節と
終すは是くし権列有志よ、故處に早良親王と祭しとあり舎人親王に撰
○にいで元下地主の神としとあり當社の社事ハ毎年五月五日に社家
甲曹と著し馬子騎して供奉はあ日矢鎬馬ありそ皆蒙古征伐の
ま凡ちなりと云り

○著聞集云 壱川院の附五月五日江帥菅蒲とまじりては伏子

進上 水邊 菅蒲

十年 五月 五日 大江為武

は状を殿より出さるて人々よあくと作しとされとこそその心と
ある人なるりけりよ際形によ海をける

たてまつるわづらふべのわやあまらとせさるまきのいつうあえせむ
進上 水邊 菅蒲 十年 五月 五日 大江為武

襖か〜〜〜〜〜ん花の雪 秀全

○新後撰集 海なく木のそとせりり埋むる

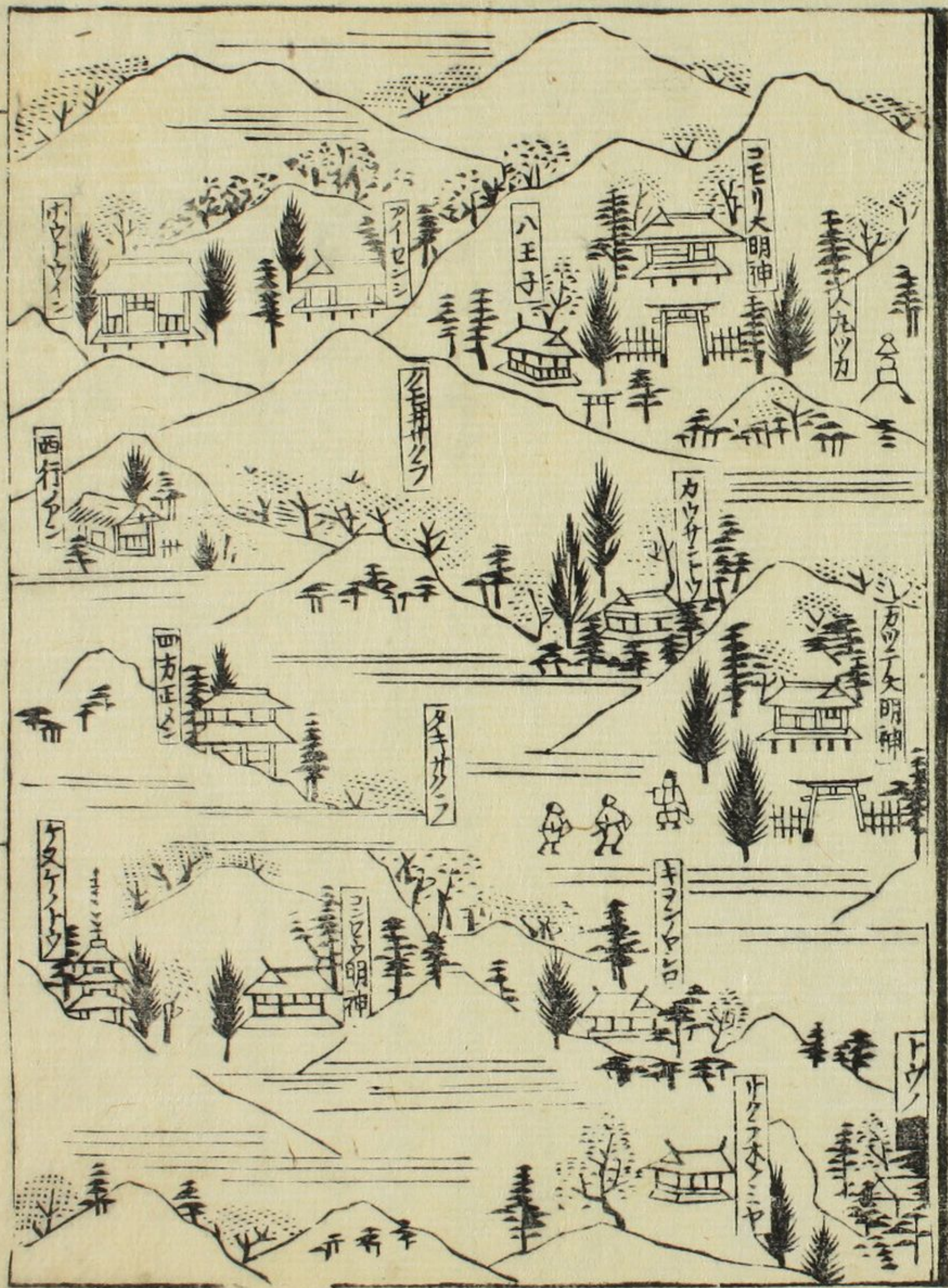
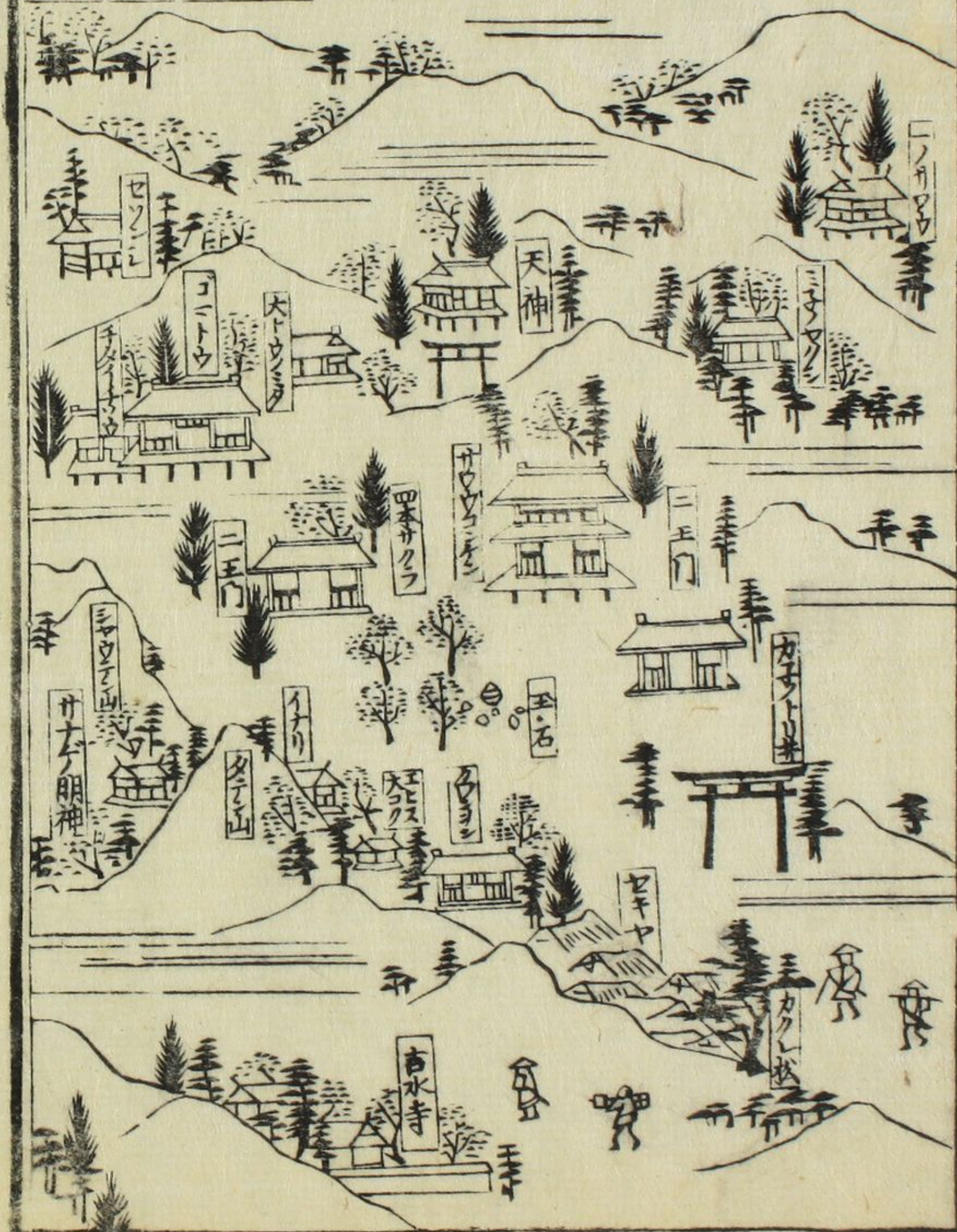
よらふまつ〜〜〜ぬむい〜〜 後伏見院

○後撰集 麻をぬのいぬよりあつらふるの川

まつまつ〜〜〜あらしとゆける 湯河原

○古今著聞 云和泉式部攝者河(番)りきるに田中雨林の
作しよて対面の志けりよい〜〜とあまひけりよに田中
けり臺のあをとりよものをとりてまじり海りり〜〜下向の終す
そんあをれをばあを〜〜〜そ〜〜〜〜〜次日或
〜〜〜〜〜と見え〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜をわ〜〜〜河若と〜〜〜〜〜〜〜〜〜と云
〜〜〜〜〜とびりけり〜〜〜

吉野山圖



東山圖

二

東山圖

二

環堵菴記

栳北述

家語曰儒有一畝之宮環堵之室原憲居之
注堵長一丈高一丈 環堵為方丈
 瞻之長明の方丈の室とるるもはあつたや予は菴一丈
 四もはつたや予は菴一丈四もはつたや予は菴一丈
 宋君一もはつたや予は菴一丈四もはつたや予は菴一丈
 もと雪一もはつたや予は菴一丈四もはつたや予は菴一丈
 かかるとはつたや予は菴一丈四もはつたや予は菴一丈
 の舎りつたや予は菴一丈四もはつたや予は菴一丈
 芒昧之中和雜滑濁變成陰陽二氣二氣凝結變而有
 形形既成就變而生肩且從各出有變而為生自有還
 無變而為死而生來死往變化循環亦猶春秋冬夏四
 時代序是以達人觀察何哀樂有哉かんのあつたや

ひとつ野危の日多く出段をうましくぬの濡干に述保の
 浮巢乃上下中をさぐるかゝるや

世に經いふ所の浮巢也置巨燧 栳北

○建春門院哥合 水鳥並列

源光政

子とわふふのうきまのゆきまをすくとすむとてんれれは
 はあめつとてからつた社盜法味物してふくうのうきま
 湖ハ滿于あまものたもとよとまうとてさうのまを中ほど
 めて拵換とてころりてめつらよらびをを湖滿てはふあり
 沙千よらふてふしゆとをれりかきものよらふてふさうり
 ○明日香并敏之集 ゆくもあつた鳥のうらふもよらふ浪
 波ぬほつたを廣沢の池 ことあつた

○磯磯 和名途保 郭璞方言注云磯鷗野鳧小而好出沒水中

松風ハ故所も同縁宿しうす蒲園

梅五

○松風卷云とて一秋おも多しうつあくなれどかこのこと
きんとかたあふれおつひのひつさきね人ともあふ
うにうちとけしひひまの風をさすくあふさあう尾
きとあふれひまのうらみあふさあうひ

方とてひひらくふる古のまきーにゆるる松風をさく

○後撰集云石上とらふ寺にまうてく日のくまにれを夜雨
けしてうらみゆらんをさあふさあうのちよ通昭ゆりすとて
ものひかえんとしてひひらゆる

世のうらみ縁をさあふさあうとさびー毒の衣を我はかきん
とひひらゆるをさあふさあう

世にをびく毒の衣をさあふさあうとさびくさあう後人

借正通服

小啓小町

雲井もくちやるまの海霧いりく 吟園

○建仁寺合 とやうりの死るのまのまのきりく

月やいひのあきよおし 女房

○神樂歌 きりくすの福さあふれとらんそのまのまのきりく
の終とゆりくんとてをさあふさあうのあきぬとさあふ
ま福さあふさあうとさあふそのまのまのきりく

○きりくすあふらきとさあふけ三貴ハ和漢とと不得辨弁

○詩函風日五月漸嶮動股六月蒹鶉振羽七月在野八

月在宇九月在戸十月蟋蟀入我牀下

○朱子註曰斯螽蒹鶉蟋蟀一物隨時變化而異其名
做去新義曰斯螽蝗也蒹鶉促織也蟋蟀蛩也自是三物
安得謂之隨時變化而異其名 朱註此處可改之

古今注曰燕鷄一名促織一名絡緯一名蟋蟀

爾雅曰蟋蟀登治法俗ニ云コウロキナリ

類和名抄云絡緯一名促織和名波太蜻蛉和名古保

蝻蝻一名蝻蛸一名蝻蝻一名蝻蝻以蝻豆木蟋蟀一名

蝻和名木里如此異名和名共皆混雜ス

促織鳴懶婦驚蝻テテ人懶惰コロー星

東坡促織詩 月最號耽露葉泣薄く夜長不自

那憂公子寒○杜子美詩 促織甚微細哀音

何勤人草根吟不穩牀下相親コトハコツ

渡千裁集 きのりくすねむびやなもおひりあゝの

虎むらさきのあゝん 昨無さ今云さりくさん

龜ふふ七百さ 福やま入虫凡もらひくかいふのくい

枕りかりしきりくすなる有ちきい まるきい

旋花カホや馬カ子カ水カ領カのカはカ川カ 伴聲

夫木集 旅人のよもこのるのりより子

勅古今集 約とめくひとあるらんふゆこの

○旋花盛于日午而且暮萎故俗對以牽牛花絲朝顏此

名登類 ○和名波夜比止久佐 ○鼓子花 此留加保

○山家集 底むくく浪ホまうる所もあ

○馬尺周少六尺以上馬と一五尺以上駒と凡又八尺以上

龍と尺和胡の馬尺四尺と定尺と凡と五尺と四尺一寸

○西行

○馬尺周少六尺以上馬と一五尺以上駒と凡又八尺以上

龍と尺和胡の馬尺四尺と定尺と凡と五尺と四尺一寸

あつと一すいと云ふとさうりす八并に至んハすより上を長に餘れと云
又云四尺一寸より三寸寸をすすと唱、四寸より上とすと唱

○淮南子云塞翁馬ヲ失へリ馬胡国ニ入人是ヲ吊ス
翁ノ曰諺ソ福ヒタルコヲ知ニヤ数月アリテ共馬胡

駿ヲ將テ飯ル人コレヲ賀ス翁ノ曰諺ソ福ヒタルコ
ヲ知ラニヤ其子是ニ乗テ墜テ臂ヲ折人コレヲ吊ス

翁ノ曰焉ソ是福ヒナルコヲ知ラニヤ後ニ秦万里城
ヲ築共子廢ニ翁老タルヲ以幸ニ免ルコヲ得タリ

○東坡詩云人間万事塞翁馬推枕軒中聽雨眠
○著聞集云武藏国都洗平太経家と云者平家の邸中を坐

らるる也枕系家時子あつけしと云は者名云ぬるゆるけり
しりり奥列より粧却云へ悪馬をなりしに強念の中

家人なまりしは河津家系りおのせりりよめて罷と免さるる麻

の別あになるは河津家系りゆるゆるは夜せばさうり子何ふうわん自

物と一りけりつゝゆるゆるは夜せばさうり子何ふうわん自

ハ単一把も髪ばさうりつゝゆるゆるは夜せばさうり子何ふうわん自

船沢の山物の時と七八丸輪登てくら致しるに河津家系りゆるゆる

子さうりひてそりけり幕下のもあつてさうり時ゆるゆるは夜せばさうり

は河津家系りゆるゆるは夜せばさうり時ゆるゆるは夜せばさうり

梅く者やとさうりゆるゆるは夜せばさうり時ゆるゆるは夜せばさうり

○その日大臣家會 落梅浮水 改ぬ
ちりりゆるゆるは夜せばさうり時ゆるゆるは夜せばさうり

○に徳天皇の御宇難波の梅は氷のころにわめて落るる
ふりりゆるゆるは夜せばさうり時ゆるゆるは夜せばさうり

梅乃氷と稱と又云落梅氷にゆるゆるは夜せばさうり時ゆるゆるは夜せばさうり

上ノて管窺水のみありはるまゝ流の極利川多郡厄う得ぬの
南郡波村あり世に秘波のむめと稱するの号やこのとれの内
製いふてなり 棧陽郡誌

○李郢詩 春風掩映千門柳晚色淒涼萬井煙

○本草云井水平且第一汲爲井花水其功極廣

○淮南子云伯益井と仰る注益舜と仰る河のあり

井と仰る又呂氏春秋の如く也を仰るを仰るなり

○玉曆云凡欲穿井處於夜氣清明時置水數盆於其地
者何金星光最大而明定必有其水

○韓詩外傳云魯の哀公井と穿し三月卒て泉と出たり
の玉羊と出る哀公とあり懼家孔子の白水の精ハ玉と出る土
の精ハ羊と出るハ羊の肝土とあり一哀公羊と殺む肝昂とあり
○廣博物志云井神曰吹簫女子

夕立の洗ひ出りや峰に松 涼牛

○伏見院赤元法師 深ふ山や松吹きあり夕立の

○玉葉集 夕立の洗ひ出りや峰に松 涼牛

伏見院

○天文書云雨者雲上隔日氣下隔火氣冷濕氣在雲中
旋轉相盪爲雨譬如蒸水因熱上外作氣者雲象也

○史記云秦始皇上泰山風雨暴至休于松下枝垂禦雨

因封爲大夫○事類全書云栽松春社目前帶土栽培百
株百活舎此時次登生理也○五雜俎云松欲不長以石
抵其直下或斃其頂則不復長旁幹四出久即偃地矣是を
以て松の掃列曾林の松京師報國寺の松は汲みよるなり

私云い限し會しきその可きなり 船の上社
 今社社より十八所なりとの今しよて船者一七處
 ありと伝ふしと云り 船遠き船のりかえりては油を
 いちりひ七月の月しきと申すん あり人なりん
 ○延喜式神名帳云 稻荷社三座下社大山祇中社倉稻
 魂上社土祖神矣或為五社則中社伊井母尊倉稻魂命
 瓊々并尊也○元明帝和親四年二月十一日三所を無礙
 成三月九日戊午の月と云く 延喜式云 弘仁十四年始に社建つ
 延喜八年 藤原時平公三所の神殿と云ふ
 ○詞花集云 歌の處分と云ふく人よりと云ふは 伊豆の
 河へ伊奈村よりと云り 伊豆の河の邊に社あり
 永き世ありき 伊豆の河の邊に社あり 伊豆の河の
 ○三才圖會云 烏陽物也 感陰氣而重故俗以此占雨

玉編へ 氷柱の 氷柱の系

壽躰

○千首 形智なりきひの折め今人して
 ところくまらひぬいなり ありん
 ○枕草子云 玉の月よりなりはよみ かくかぬき
 かしきとらありあり 氷晶のりきき ありん
 かくしき かくしき かくしき ありん
 わかりてめてとらなるひに下きん ありん
 いしたくわげなるいかくしき ありん
 ○中華正徳年中 順天府文安縣水忽僵立是日大寒 遂
 凍為氷柱 高五六丈 四圍亦如之 中空而旁有穴 凝結甚
 固 逾數日流此 亦古今所未見之異也 三才圖會
 ○博物志云 鯨人水底居 出向人間 奇作 積日 賣 銷 臨 去

徒主人モロテ器ヲ出テ珠ヲ以興主人ニ

○今むじはりの美を重んずる者上流に於ては後にはたせ
又此の言つる今のあらうか。唐人の物に六七は是れ也。た
や變にまきける。海邊よりいさ。後及にみゆ。せ又さうら
す。に中て海ららるに流。其形は流の中。海高す。もの
のける。まき。今人。ゆる。者。らん。と。あ。る。の。あ。る。ま。う。わ。ら。ひ。せ
と。せ。らん。今人。水。子。と。ぬ。ぎ。て。あ。る。ま。う。今人。と。あ。る。ま。う。の。あ。る。ま。う。と
て。く。て。ら。う。日。好。好。く。つ。の。精。多。に。海。民。物。を。ら。る。下。は。唐。人。今。ま
と。や。と。あ。る。唐。人。今。く。二十。貴。三。貴。い。らん。と。あ。る。ま。う。の。あ。る。ま。う。と
よ。く。ま。や。と。あ。る。唐。人。今。く。つ。あ。る。今。人。今。く。あ。る。ま。う。と
あ。び。て。七。十。貴。の。雙。子。を。き。く。太。早。海。を。く。く。く。古。水。子。一。つ。ま。う。ら
もの。ま。う。の。あ。る。ま。う。と。あ。る。今。人。今。く。あ。る。ま。う。の。あ。る。ま。う。と
ま。う。の。あ。る。ま。う。今。く。あ。る。ま。う。と。あ。る。今。人。今。く。あ。る。ま。う。と
下略 宇治拾遺

上流の系類に子柄の押う如 暗躰

○夫木集 まりのを柳はくさうりく

くまにけきうらやあましん ぬ家

○砂不集云或人の女房種余の宿女あうあうけり弄一の
乃も心けくやさき女房ありのあうかきうさうり
らん事のついでとあめくか海らるをうさうりやとあひ
はあ裁の海らるのかる里の里の一本と一そのよあるあ
まのをうらまうとくたこよいりて

○著聞集云侍従大納言成通つはあうまゆを改修しか
里いあうまうり七五日其申すはあうまゆ第二子りて

病にありし時、外をくまると是よりあてたるの時、天に教ふて
きりしに、或時、七人をおきて、指しおるより、きりしに、肩を
て、指しおるより、小難とけし、その中、法陣、人あり、
と、肩より、やそ、死とも、肩より、か、く、く、く、く、く、く、
おつて、い、く、さ、あ、く、く、く、く、く、く、く、く、く、
ま、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、
や、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、
又、清水の、森、森、の、く、く、く、く、く、く、く、く、く、
あ、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、
中、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、

○精大明神社 京中、河内、西、洞、院、あり、改、通、つ、を、記、し、鞠、の、祖
神、と、は、け、不、別、居、住、の、地、に、記、氏、人、祭、之、云
小社三座

京女郎田舎女節や雲乃峰

イガ上ノ

紀之

○傍兼乃沖、京女郎田舎女節と、三つ、記、し、あり、傳、ふ、の
屋、傳、ふ、十、余、丈、の、衆、人、の、あ、り、く、く、く、く、く、く、く、く、
ひ、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、
ふ、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、
ん、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、
く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、
○左傳云、昔有貞婦、其夫、從、役、遠、赴、國、難、推、弱、子、餓、送、此、
山、立、聖、夫、而、化、為、石、因、以、爲、名、大明、一、流、志、は、く、く、
乃、記、し、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、
高、垂、く、く、く、く、其、女、依、用、解、解、と、惜、く、く、
ひ、の、追、き、く、く、く、く、衣、の、中、と、振、り、く、く、
私、と、振、り、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、

死も其山の中振山と名付て其灵と祭るとして
件乃石わを是より望夫石とす

○陶淵明四時歌

春水滿四澤 夏雲多奇峯

秋月揚明輝 冬嶺秀孤松

○草山集 夏雲多奇峰得奇字 元政

夏一日雨晴雲出時 橫峰倒嶺疊天涯
無心巧效皆如此 倏忽飛來也一奇

相列塔以へまうり一時旅飯にて

凍——とや月、湯坂乃肩車 晋阿

○玉葉集 風はゆる木ぬるの月のまろしき

松らうたるたふさの宿 因白大改官

○湯坂作、湯本と塔の沃の石の心し ○夫本集に管根の月

ありけとこのおきよくくも湯をいすめる月を 孝純

○管根温泉、所謂塔、沢堂、鳥宮、下湯、本木、賀底、倉、芦湯也

○五雜俎云、大凡、温泉之、発源、共下、必有、朱砂、或、硫黄、馨

石、蓋、天地、至陽、之精、所結、也、其氣、甚者、薰人、不可、耐、人有

疥者、浴之、輒愈、矣 ○本綱云、温泉、味辛熱、微毒、其下有、硫

黄、浴之、則、藥人、肌膚、硫黄、主、諸瘡、故水亦、宜然

○博物志云、凡水源有石硫黄、其泉温

○羅山子題箱根山詩

鯨背浪高、伊豆、島 馬蹄雲起、管根、山
相逢、盡道、歸耕、事 歲々、年々、幾、往來

○宗祇、方南、抄云、足柄山、所、坂、園、竹、の、り、乃、八、を、さ、あ、く、り、た、二、孫
心、の、心、し、い、め、の、湯、乃、今、の、管、根、を、湯、乃、ま、せ、り

菖波の氣跡をうたごの浦 露川

○拾遺集夏 多指のくく底さく人自よる及浪致

かきししてゆんえぬ人のくえ 持本人店

○新撰古今集春 六のころの多指の菖波波うけ七

ゆきてよかたを神やぬきとらん 土浦門院

○多指浦、越中村、水知、友の多指くし波のよ月あわり

○源相規詩 露藤露底残花、色翠竹煙中、暮鳥声

○本細云四月生紫花、可愛長安人、又云種、飾庭也、其子

作角、角中、仁葵香着酒中、今酒不敗、敗酒中用之、亦正其

花、按碎、拭酒醋白腐壞、○順和名 布知 又有白藤

○冬月酒粕汁及米泔汁灌根、則茂盛

○挿藤花於水、最易萎、灌酒於其木、莖則歷時不凋

かりらの平岡のまじりてあま

花雪の介と胡蝶の音吹うた 采山

○ ちあつとくくくひ社とくくく海

ちあれあくきこのま賀のふ紙、 玉ぬ

○ 千首 雪のまじりてあまぬほくくく

雪のひりくくくぬくくくくあみ

○ 家集 ちあつとくくくくくくくくくく

ちあつとくくくくくくくくくく

いぶ鱈のつるよ持せんたるあま 寥和

○ 若菜葉上云中細をまほ、あまりてさくき根とくくく

あつとくくくくくくくくくくくく

のけだんありんつととをたつ〜今めさ〜り行よせ〜
 ○夫木集 々々〜ありれ〜る〜せ〜る〜
 〇歳時記云正月七日七種ノ菜ヲ以テ羹トシ絲勝ヲ
 剪テ人トシ或ハ金ヲ縷ノテ人トシテ以テ相遺ル
 〇錦繡萬花谷云正月七日登岳竊四方得靜陰陽除煩
 惱之術也 〇蔣 和名奈都那 俗スリニセニリサ
 〇本朝供七種菜始延喜十一年正月七日
 〇吳魚 東醫宝鑑大口魚云魚之大口者曰吳鱈俗字
 〇吳魚多北海少南海冬月未之性喜寒夏月全無故俗
 作鱈字矣味鮮魚不佳作鱈甚佳

三々終

字書品目 定榮堂

大坂心齋橋南四丁目

吉文字屋市兵衛

早引正字通

大本増補 真字引

全

真字畫引ニテ字ヲ見ルニ甚早シ是ニヨツ
テ早引ト題ス早キ字ノ引ヤウ委ク右ノ
本ヲ見テ知ベシ奥ニイロハ引四射千字文
其外文字ノ要用ヲ集メノス

廣益三重韻

小本全二冊 并薄用摺 合本

唐音附改正増補此廣益大ニ他ノ三
重韻ニマサレリ

增益伊呂波韻

文字訂正熟字入 全

四季分平仄附袖中節用集

懷中 小本

文字ヲ正シ假名遣ヲ改和哥連俳ニ用ル字
ハ春夏秋冬ノ季附ラニスベテ一字毎ニ平
仄ツケカ事ニ通達ノ節用ナリ

急用間合即座引

節用捷徑 懷中 小本

字ヲ御引被成候ニ至極早ク御座候其訣ハ是
迄有來候節用ニ弘法孝行光明 三聖
入候故何ニ有候ヤ分カタク尋候ニ際入申候此本ニ
ニ加様ノ字ニギラハヒカラス即坐ニシレ申候其外字
早ク引ケ候様委本口ニ記置候御覽上御被成候

小補韻會

全四十冊

大廣益會玉篇頭書

毛利貞齋撰 十二冊

初學指南抄

毛利貞齋撰 學文ノタヨリニナルヲアツム

卷懷韻鏡

折本懷中本

無相文雄師闋〇長ク廣ク見ル時ハ文字ノ
顯明ラカニワカリ便利ナル存ナリ

